

硫黄島遺骨収集

第4次派遣に参加して

山下 輝男 陸自69

1 はじめに

終戦から70年を経てまもなく、大東亜戦争の戦没者のうち113万柱が、南溟に沈み、人跡未踏のジャングルに若生し、酷寒の地に埋もれ、望郷の念絶ち難く、今なおさまよっている。未だ帰還を果たせぬ数多の戦没者の御遺骨を収集・収容し、故郷・ご家族のもとに御帰還頂き、その霊を鎮魂し、安らかに眠って頂くのは、国家の責務であり、齊しく国民の義務ですらある。

平成28年度から遺骨収集・帰還は国家の責務とされ、平成28年度硫黄島遺骨収集第4次派遣に、大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会の一員として参加する機会を与えられた。

折角の機会であるので、我が国の遺骨収集・帰還事業等を概観し、小生の体験を紹介したい。

2 硫黄島における遺骨収集について

硫黄島における遺骨収集は、昭和27

年以降、今までに計128回にわたり行われ、戦没者21,900人中、帰還数10,390柱となっており、帰

還率は約49%である。(平成29年1月末日現在)

政府は、平成25年関係省庁会議を設置、更に平成28年には戦没者の「遺骨収集の推進に関する法律」が成立し、平成26年度から平成30年度まで外周道路外側の面的調査を行うと共に、滑走路の調査に基づく収容後、滑走路の移設に着手する方針のもと、10数回の開削調査と年4回の収容派遣を行っている。

3 参加行動の概要

1月17日、入間市内のホテルで結団式。翌日、空自の特別便で小牧経由硫黄島にフライト。天山戦没将兵慰霊碑において来島報告を行った。派遣団は総勢34名、遺族会、硫黄島協会及び旧島民の会からは各7名、借行社を含む全慰協等の諸団体から各2名の参加であり、派遣団長は推進協会幹部である。

18日から、2カ所に分かれて収集活動を実施。午前中3時間、午後2時間の作業だが、午前の作業終了後にはシャワーを浴びて着替え、午後も同じと、かなりハードな作業であった。日曜日は休養日であり、摺鉢山をはじめとする戦跡巡りをした。

壕及びトーチカでの作業は、壕底が見えるまでの排土、遺骨の収容、排土を土砂と遺骨に選別、洗骨、仮安置室

への仮安置との手順である。作業の開始終了時には、壕等に対する拝礼を儀礼とする。

1月31日、現地追悼式を行い、2月1日、今回収容した4柱を含む今年度収容の17柱を、遺族等が捧持して、硫黄島、入間基地での儀仗隊による捧げ銃、追悼の譜のもとで見送りを受け、都内に帰還した。

2月2日には、千鳥ヶ淵戦没者墓苑において厚労省へ引き渡し、解団式となった。なお、厚労省では安置室に安置するという。

4 遺族の想い・心情に触れよ!

派遣団には、日本遺族会や硫黄島協会の関係者が多数参加されており、時折お話を伺う機会があった。詳細は割愛し、一つのみ紹介する。

「父親が硫黄島で戦死され、何回目の来島時に戦死した場所と思しき地点が特定でき、父親に会えたとの感を強くされた由。小さかりし頃は父無し子は矢張り駄目だといわれたくないと母親に厳しく躰けられたと云う。次回の慰霊祭には子息2名を同行して色々と言明する心算」と話された。

5 参加所見

多々あるが、3点のみ。他については、JPSNの記事を参照して頂きたい。

(<http://www.jpnsn.org/report/iwoto/>)
● 英霊の声なき声を聴け!

慰霊の島に身を置き、遺骨の収集・収容に係る作業を通じ、今なお眠る1万の英霊の声なき声に耳を傾け、切なる叫びを感じようとした半月であった。日本国として、国民として、全ての御霊を本来居られるべきところにお返しすることが、重要な責務であることとを改めて痛感した。

国家が、最終的に責任をもって、御遺骨をご遺族のもとにお返しすることを保証し得ないようでは、国家たりえない。「骨は必ず拾ってやる」と言って送り出したはずだ。その事をひしひしと感じて欲しいものだ。

● 抜本的な収集方策が必要では? 年に4回、1回の派遣団員数が30数名で、しかも1回の収容数が10柱にも満たない状況で、設定された集中期中間に1万に近い遺骨収集が果たして可能か? 何が問題なのか? その対策を速やかに講じるべきだ。

硫黄島のみならず、海外での遺骨収集についても同様である。国内外の文献の徹底的調査は当然だが、現地住民からの聞き取り調査も必要だ。それらの諸情報をデータベース化して整理、分析し、可能性のある地域を検討することが必要だ。そのためには、現地に相応の拠点を設けることをも考慮すべ

きではないか。現状のままでは戦後80年に目途をつけるとの目標の達成は絶望的だ。

● 遺骨収集の重要性等を更に広く国民に周知すべきでは？

慰霊の島、鎮魂の地である硫黄島、その硫黄島に今なお1万近い英霊が懐かしの故郷への帰りを待ちわびておられる。そのお手伝いをすべく、今回のような収容団が編成されて御遺骨収集・収容をしていることを、国民のい

かほどが承知しているのでしょうか？ 厚労省のHPや各団体の機関誌やHPではそれなりに周知の努力がなされてはいるが、果たしてそれで十分に国民に浸透していると言えようか？

6 おわりに

未だ帰れぬ数多の英霊の眠れる鎮魂の島。その無念の島から故郷への帰りを切望する魂を、いかに早くご家族の下にお返しするか。与えられた枠の中で一生懸命に、一兵卒として老骨に鞭打って働くことが、ご遺族の想いに応えることであると信じての本事業参加であった。

遺骨収集事業の一端に触れ、ご遺族の心情等を肌で感じる事ができたのは、有り難いことであった。本体験記が、後に続く諸氏の参考になれば望外の喜びである。また、ご遺族や関係者

でない方も、こぞって本事業に参加して頂きたいものである。

御遺骨の帰還なくして、戦後とは言えない。戦没者の帰還を果たした時こそが、戦後の始まりであるべきだ。今日日本の復興と平和は、戦没者のお陰であると銘肝し、一日も早い全御遺骨の収容・帰還を果たすことが国民の義務である。

